



地元で育った木に命を吹き込み 人々の暮らしとともに未来へ

西部木工のある那賀川下流域は、かつて木頭杉を原料に阿波の三分板と呼ばれた薄板を作る西日本有数の製材団地として栄え、木工や建具の工場も多く存在した。しかし、海外産の建築材の導入や価格競争などにより、廃業を余儀なくされた工場も多くあったという。

この状況に代表の西岡章さんは危機感を抱いた。廃業してしまえば、そこにいた職人の技を未来へ残すことができなくなる。機械で商品を作ってみたが、特注品などは職人の卓越した技が必要だ。職人の技は、唯一無二、強みであることに気がついた。そこで生まれたのが、自社オリジナルの『ARTISAN』アルチザンシリーズだ。寺社仏閣のように釘を一切使わず木組みだけで作る逸品。その構造美と杉や桧のぬくもりが織りなす美しさに多くの人が心奪われている。

今、西部木工にいる職人は10人。少しずつ職人も育ってきているが、若手職人の育成は大きな課題の一つだ。「こればかりは地道にやっていくしかないですね。今後はさらにもものづくりに興味を持ってくれる若者を発掘していきたいと思います」と西岡さん。世界に誇れる日本の森林資源と職人の技術を未来へつなぐため、西部木工は歩を進めていく。

Profile

西部木工

那賀川下流域の阿南市那賀川町西原地区で、平成元年より室内家具製造を行う。自社ブランドの『ARTISAN』アルチザンシリーズのハイテーブル『KIYOMIZU』は、国賓も訪れる清水寺の迎賓館で使われている。制作過程で出た木くずは焼却せず、畜産の糞と混ぜて発酵させ、堆肥となるサステナブルな取り組みも行っている。

